

2019年9月1日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「今日も、明日も、神われらと共に」

聖書：ルツ記1：16～2：3

ナオミは、夫との間に二人の男の子を授かり、幸せな家庭を築くが、しかし、この地域に飢饉が続き、仕方なく故郷ユダのベツレヘムを離れ、異国のモアブに移住する。旅立った四人の家族は、不幸な状況に立たされる。夫は、妻ナオミと二人の息子を残して死んでしまう。それからしばらくして、二人の息子は、モアブの女性と結婚するも、10年後、二人の息子も死んでしまった。ナオミは、異国の地において、夫を亡くし、息子を亡くす不幸に見舞われ途方にくれた。

ナオミの決断は、故郷のベツレヘムに帰ることであった。夫を亡くした二人の嫁オルパとルツもお姑について行こうとする。お姑の悲しみ、辛い気持ちがよく分かるがゆえであろう。しかし、お姑の拒絶に一人の嫁オルパは、別れることを決意した。しかし、もう一人の嫁ルツは、お姑についていく決意を曲げない。「あなたを見捨て、あなたに背を向けて帰れなどと、そんなひどいことを強いないでください。・・・あなたの民はわたしの民／あなたの神はわたしの神。」ナオミにとって、これ以上ない慰めの言葉であったろう。

ルツの決意と言うものを、私たちはどう見ているか？ 良く出来た嫁だなあ～と感心して見ていないか？ ここは、一人の人間、ルツの「あなたの神はわたしの神」と主体的に受け止め決断したこと。その神と共に生きようとしたこと。それは、古い習慣に倣って、お姑に服従した・・・ということではなく、本人が確信を持って、選んだ自主的な生き方をしたということであろうかと思う。お姑ナオミと“寄り添って生きる”という生き方を決断したということである。

このルツの物語には「家族」は、決して血縁関係のみが家族ではない。たとえ血の繋がりはなくても、神の導きで出会った者は、家族となるということが語られている。また教会は、よく“神の家族”と言われる。私たちは寄り添って共に礼拝をする者として、“神の家族”であり、たとえ貧しい状況の中にあろうとも、共に居られる神と歩む者でありたいと願う。

最後に、ルツは、お姑のナオミと“共に生きる”という生き方を決断したが・・・。その場所はユダヤのベツレヘムとなっている。このベツレヘムは、のちにイエス・キリストが誕生する場所である。この物語は、イエスの生き方の伏線としてあるということになる。キリストは我々と共に生きる、私たちと寄り添って生きるという約束がここに示されているのである。あなたが苦しい時も、悲しい時も、嬉しい時も、神はあなたと寄り添って居られる。その約束がルツ物語の中ですでに示されていることを覚えたい。今日も、明日も「神われらと共に」。  
(神谷)